

## 第6週(2月3日～2月9日)トピックス:<百日咳>

百日咳は特有のけいれん性の咳発作(痙攣発作)が長期間続く、急性気道感染症です。母親からの免疫(経胎盤移行抗体)が十分でないため、乳児期早期から罹患する可能性があり、1歳未満の乳児、特に生後6か月以下では死に至る危険性もあります。

本感染症は2017年末までは感染症法上の5類小児科定点把握感染症に規定されていましたが、ワクチンの導入により患者は激減し、散発的な発生や家族内感染、また、学校・施設・地域内での集団発生の報告となっています。このため、2018年1月以降、より正確に発生状況を把握する目的で、5類全数把握に変更され、診断したすべての医師は7日以内に届出なければなりません。

### 【患者数】

全数把握となった2018年以降の報告数の推移を見ると、本市で2018年に87例、2019年に113例と年間100例前後、全国では12,115例及び16,846例と年間1万人以上の報告がありました。2020年以降は新型コロナウイルス感染症の流行拡大に伴う感染予防の徹底等により、本市、全国共に激減しました。しかし、2023年5月の新型コロナウイルス感染症の5類定点把握への移行後は再び増加に転じ、本年は既に6週時点で本市13例と前年の半数、全国は1,150例と前年の4分の1となっています(表1)。過去同時期と比較しても、最も報告数の多かった2019年に迫っており、今後の発生動向に注意が必要です(図1)。

### 【年齢構成】

2018年～2025年6週までの全国の年齢階級別割合を見ると、5～9歳が最も多く(32.1%)、次いで多い10～14歳(26.4%)となっており、これにワクチン接種前の時期を含む0歳(5.0%)、及び1～4歳(6.2%)を合わせた15歳未満で約70%となっています。一方、小児科定点把握では報告されていなかった成人患者が約25%(20歳～64歳が22.1%、65歳以上が3.5%)を占めています(図2)。

### 【百日咳】

百日咳は百日咳菌の感染により発病します。感染経路は、鼻咽頭や気道からの飛沫感染及び接触感染で、通常7～10日間の潜伏期間の後発症します。症状は普通の風邪症状で始まり、次第に咳が激しくなります。その後、特徴的な短い咳が連続した咳き込み(スタッカート)の後、息を吸うときに笛の音のようなヒューという音が出る(ウープ)発作の繰り返しが約2～3週間持続します。息を詰めて咳をするため、顔面の浮腫、点状出血、眼球結膜出血、鼻血などが見られることがあります。その後、回復するにつれ、次第に激しい咳発作は弱くなりますが、時々発作性の咳があり、発症から回復するまでに2～3か月かかります。

なお、乳児では典型的な咳が見られないこともあります。重症化すると、無呼吸発作からチアノーゼを起こしたり、呼吸が止まり死亡する場合があります。

### 【予防等】

予防はワクチン接種です。定期の予防接種では生後2か月から計4回の接種が必要です。予防接種をきちんと受け、乳幼児を百日咳から守りましょう。

百日咳は、初期症状では風邪による咳だと思ひ込み、受診も遅れがちです。百日咳菌は周囲への感染力が強く、症状が軽くても菌の排出があり、家族内で患者と接触した場合、感染リスクは非常に高くなります。特に、予防接種をまだ受けていない新生児・乳児が罹患すると重篤化しやすいため、周りの人が感染源とならないよう、手洗いや咳エチケットなど基本的な感染対策を徹底し、注意しましょう。また、自覚症状があれば早めに受診しましょう。

表1 京都市及び全国の報告数の推移

|     | 2018年  | 2019年  | 2020年 | 2021年 | 2022年 | 2023年 | 2024年 | 2025年<br>6週 |
|-----|--------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------------|
| 京都市 | 87     | 113    | 19    | 4     | 3     | 1     | 26    | 13          |
| 全国  | 12,115 | 16,846 | 2,819 | 707   | 491   | 1,000 | 4,054 | 1,150       |

